

中上健次の"韓国・ソウルサーガ"をめぐる小論

——短編小説「町よ、ソウル イテウオンの女」を読む——

李 恵 慶 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

「路地」から「韓国＝ソウル」へ ——「日本」「文化」への問い直し

戦後生まれ初の芥川賞受賞者となった中上健次を「路地」の作家と呼んでもよからう。「路地」という強力な物語磁場を背景に、主人公・秋幸の濃密な人間関係と独特な世界観が描かれた『岬』(1976年)、『枯木灘』(1977年)、『地の果て 至上の時』(1983年、以下『地の果て』)の「秋幸三部作」は中上文学を代表する傑作として今なお高い評価を得ている。

とはいえ、当然ながら中上文学のすべてが、「紀州・熊野サーガ」と呼ばれる物語群に集約されるわけではない。作家の誰しもがそうであるように、彼にも文学的転換点と呼びうるいくつかの節目があり、その都度大きな変容を遂げている。なかでも「路地」の解体はその最たるもので、中上文学に地殻変動をもたらした大事件といえる。

中上が「路地」という独自の文学的虚構空間を創り上げたのは『岬』においてである。それを『地の果て』では自ら焼き払い「さら地」にする。物語の磁場として最も真近なトポスと自分の分身でもある「秋幸」を失うことが、いかに危ういことなのかは想像に難くない。しかしそれは新たな世界への入り口でもあった。

実際に「路地」解体後の中上文学は、これまでとは打って変わって政治的なものになっていく。テキストにおける「路地」の意味の変化はそれを端的に物語る。『地の果て』以降、「路地」はもはや文学上の虚構世界ではない。これまで厳格に距離を保っていた被差別部落とほぼ同義として用いられ、差別の問題が前面に躍り出る。そもそも中上の「路地」の解体が、日和山開発という再開発事業による被差別部落の消

滅と表裏一体であることを考えると、「路地」の「さら地」化は、現実の被差別部落問題への文学的コミットメントの意思と捉えることができる。

「路地」解体後の中上文学の最も大きな変容は、差別-被差別の回路の導入によるテキストの政治学と呼べるものであるが、そこで新たなトピックとして登場するのが天皇と世界の「路地」である。

両者は一見無関係に見える。だが、無関係どころか、後期中上の「問題＝やる事」において根源的につながっている。どちらも天皇を頂点にして「中央集権化」(全集15:484頁)が図られた「日本」「文化」への問い直し、つまり中上のいう日本を「汎アジアの眼でとらえてみる」(全集14:679頁)ことに他ならないからである。彼が自らを「逆立ちした＝ねじれた天皇主義者」と呼び、文学者としての自分の仕事を、「[天皇]の言葉による統治を拒む」(同書、609頁)ことと規定していることはその証左である。

このような「汎アジア」的視点による中上の「日本」「文化」への問い直しは、紀伊半島からアジアへ、さらに世界へと広がる。その中心に据えられているのが、紀伊半島の被差別部落と同じく、「冷や飯を食わされ、厄介者扱いされてきた」(同書:481頁)世界の「半島＝路地」である。

そういえば、半島は差別と深い関係にある。川村湊が「中上健次とソウル物語」で言及したように、「半」や「島」という言葉にはつねに／すでに侮蔑的かつ差別的なニュアンスが込められている。日本が植民地時代から朝鮮人に対して使ってきた「半島人」や、たびたび韓国人が在日朝鮮人に対して用いる「ハンチョッパリ(半-日本人)」、そして島流しと呼ばれる流罪などはその好例である。こうした半島における差

別性は、「半」に内在する不完全性と無関係ではないが、中上はそれを「半島の状況」（全集15：484頁）と呼び、より普遍的なものとして捉える。そしてまるでそれを確認するかのよう、世界の「半島＝路地」への果てしない旅を続ける。

中上の世界への流亡の始まりは、1976年に雑誌への連載のために初めて訪れた香港とマニラへの取材旅行からである。九龍半島への旅を皮切りに、マレー半島、イベリア半島、モロッコ、朝鮮半島、フィリピン等々、東西を問わず精力的に世界各地の「半島＝路地」を駆け回る。なかでもアジアは重要な意味をもつ。「日本にいると往々にしてアジアが見えなくなる」「この国の今の風潮の中で、日本が他ではなくアジアに位置するのだという事を忘れてしまっている」（全集15：318頁）といわれていることから分かるように、アジアは先述の「汎アジア」的視点の獲得に必要な不可欠な、彼にとっては「モンゴロイド」としての「逃れられない宿命」なのである。

ここでひとつ忘れてはならないのが韓国＝ソウルの特権性である。中上の朝鮮半島への旅は、「香港やシンガポール、マレーシアに共振れし、スペインやモロッコに心を奪われた後」の、「他の文化圏の楽しさ素晴らしさを知った後」のもので、時期的にはかなり遅れていた。しかし「他との共振れや眩惑と大きく違」（全集8：185頁）って、「最も苛烈に反応するボディート場の場所」（同書：184頁）という。この意味では、中上における韓国への旅は、紀伊半島への旅に続くポスト紀伊半島をめぐる旅なのであり、韓国＝ソウルはもうひとつの「紀州」といってよい。

そうした韓国体験の強烈さを物語るかのよう、中上は「韓国・ソウルサーガ」と呼べる作品群を立て続けに世に送り出す。『風景の向こうへ』（1983年）、『物語ソウル』（1984年）、『輪舞する、ソウル。』（1985年）、「町よ、ソウル イテウォンの女」（1986年、以下「町よ、ソウル」）がそれである。

これらの作品を貫いているのは1980年代の韓国のポストコロニアルな状況である。そこには韓国の抱えている様々な問題が彼独自の視点から描かれている。ただ、注意すべきは、それが単に韓国の問題に止まらず、「日本は一体この土

地で何をやったのか」（全集15：67頁）という問いにつながっている点である。そのため、「韓国・ソウルサーガ」を読むことは、韓国について考えることだけではなく、また同時に日本について考えることであり、さらには東アジアのポストコロニアルな状況について考えることである。以下では、それがどういったものか、中上の「韓国」に「日本」への問いを迫体験しながら考えてみることにする。

「町よ、ソウル イテウォンの女」 ——「イテウォン」というトポス

1986年の月刊文芸誌『すばる』に掲載された「町よ、ソウル」は、原稿用紙約20枚前後のきわめて短い短編である。物語構造やストーリーも単純明快で、米軍を相手に性売買を行うクラブホステス・ナンシルのやるせない思いと怒り、苦悩が、1980年代初頭の韓国社会を背景に描かれている。「イテウォンの女」というサブタイトルが端的に示すように、このテキストにおいて「イテウォン」は物語の磁場として重要な意味を担う。

物語の舞台となるイテウォンは、ソウル駅と南山、漢江を結んだ三角内に位置するソウルの中心部で、古い歴史をもつ。現在はソウルのなかでも随一国際性豊かな町として知られ、周辺には各国の大使館が密集するなど、様々な民族と文化が混在し、つねに新しく変化しつづけている実にアグレッシブな町である。1997年からは観光特区——現在ソウルには五つの観光特区があるが、その最初がイテウォンである——として指定され、一年中外国人観光客で賑わっている。

その一方で、別の顔も持っている。この周辺は朝鮮半島の苦難の歴史が集約された象徴的な場所でもある。その歴史は13世紀にまで遡る。イテウォンを中心とした龍山ヨンサン一帯は高麗時代末期、朝鮮半島に侵入してきたモンゴル軍の兵站基地として使われたことを始めとして、1592年の文禄の役の際は日本軍が、1882年の壬午軍乱の際には清軍が、1904年の日露戦争から植民地時代までは再び日本軍が、そして1945年以降は米軍が占領し、軍事基地や施設として使用している。龍山は軍事上の要衝であり、異民族の侵略に苦

しんできた朝鮮半島の歴史を象徴する場所なのである。

ところが、こうした軍事基地化はさらなる悲劇を生む。龍山の目と鼻の先に位置するイテウォンは、その「負」の歴史を一身に受けてきた町である。ひとつの俗説であるが、イテウォンは現在の漢字表記「梨泰院」の他に、「異胎院」という同音異語の異名をも持つといわれる。それはこの町が異民族との間に生まれた混血児を受容するための、いってみれば「被差別部落」であったことと深く関わっている。

イテウォンをめぐる「負」の歴史は、近代に入ってからより体系的に構造化される。日本帝国の公娼制の実施により、この一帯は日帝公娼地域のひとつになり、軍の慰安所が多く設けられるようになる。それらは日本軍に替わって龍山に入ってきた米軍にそっくりそのまま移譲され、現在は巨大な米軍基地村が形成されている。この意味では、イテウォンは朝鮮半島における女性の受難の歴史と表裏一体なのであり、韓国の（ポスト-)コロニアルな歴史を「女」の物語として紡ぎ出し再構築する「場＝トポス」といえる。

そうしたイテウォンの歴史や象徴性を下敷きにし、基地村女性の悲哀と韓国のポストコロニアルな状況を描いたのが「町よ、ソウル」である。テキストでの「イテウォン」はもっぱら基地村の同義語として用いられ、差別的な意味が強く込められている。

そのためか、一見すると「イテウォン」は単一で均質な空間に見える。しかし問題はそれほど単純ではない。というのも、「町よ、ソウル」では基地村に対立するもうひとつの町が登場している。実際に姿が明かされるのは一度だけだが、その象徴性は看過できない。その町は基地村から「外」側に伸びた「坂道」によってつながっていると同時に、切り離されている。

主人公のナンシルの住む安アパートの近くには大きな坂道がある。そこは、「音楽をガンガン鳴らしてアメリカの軍人」（全集8：66頁）を呼び込もうとする基地村の騒がしく雑多な姿とは一転して閑散とした静寂に包まれている。坂の上の高台には「何軒も財閥の家があり」、「そのあたりは綺麗星の如くスターの家の並ぶ」（同書：62頁）、いってみれば韓国の「ビバリーヒル

ズ」（同書：同頁）である。基地村の「生ぐさい」精液の匂いとはまるきり無縁な、「バラの匂い」（同書：同頁）の漂う別世界なのだ。

そこにナンシルが足を踏み入れることは許されていない。そもそも「アメリカ軍兵士」に「体を売る」、社会の「恥部」として最も蔑まれている彼女が、基地村という自分たちを隔離し取り締まる「赤い線」を越えてはならない。それが「イテウォン＝基地村」の「女」なのである。だが、ナンシルはその禁忌を破り、家の帰り道にそこを通る。思わず足を止めて、「この御曹司をつかんだら、何もかもは一変する」と、「財閥の家での生活を空想」（同書：同頁）してしまう。

だが、禁忌を破った彼女にそうした夢想など許されるはずがない。それは、まるで脱走防止の防犯ブザーが作動したかのように、突然大豪邸から鳴り響く電話の呼び出し音によって中断を余儀なくされる。彼女にはその電話が、「御曹司との甘い言葉をささやきあう寝室の白い電話ではな」く、自分のアパートにある「飢えて寒さにふるえながら」仕事を「待っていた」「味気のない黒い電話の音に」（同書：67頁）しか聞こえず、足早くその場を去って存在を隠す。

薔薇の匂いに包まれた高台の豪邸と精液まみれの基地村、これは文字通りに「天国」と「地獄」である。決してまじり合うことのない両者が何の違和感もなく隣り合わせになっている町こそ、イテウォンなのである。いうまでもないが、その両者は対等ではない。「地獄」にいるナンシルらがいつも無数の鏡に囲まれ、姿が映し出され、視られる存在として具象化されているのに対し、「天国」にいる「財閥」は徹底的に透明性に貫かれ、その存在を明かさない。以下の箇所はそれを端的に物語っている。

誰かに電話をかけたかった。脅迫してやりたかった。そんな大邸宅をこんなところにかまえているの、どんな気持ちですか。イテウォンの売春窟も音楽をガンガン鳴らしてアメリカの軍人呼び込もうと必死に競い合ってるゴーゴも、すっばり入っちゃいますよ。毎日、何を食べているんですか？ 私なんかビビンバですよ。毎日、アジュマの店から取るんですよ。セットなんか毎日行かれるのですか？ 私なんか駄目ですよ。たまにパーマ取れてきたら行

くぐらいですから。韓国の女の髪、まっすぐにすくなっちゃいますから。ナンシルは電話番号を知らなかった。(全集8:66頁)

大豪邸に住む気持ちはどうなのか、毎日何を食べているのか、髪の設定にもよく行っているのか、ナンシルの「財閥」の日常生活への問いは、彼女の「飢え」と「寒さにふるえ」る生活を思い出すとあまりにも切ないが、それこそ、彼らの透明性を端的に示すものである。高い塀に囲まれ、塀の「外」からは「中」の様子を伺い知ることができない「財閥」の豪邸は、彼らをあらゆる視線から切り離し、不可視の存在にする。それがつねに鏡に囲まれ、視られるものとして可視化されるナンシルらといかに対照的なのかはいうまでもない。

「誰かに電話をかけたかった」という言葉から始まる上記の引用はひじょうに象徴的な場面である。これはナンシルが、店の女たちが「べったりまといついてい」(同書:64頁) たクリント・イーストウッド似のアメリカ軍兵士を、「ホテルに連れてって」と誘いか(同書:同頁) け、外に連れ出した翌日のエピソードである。

ナンシルは朝、目が覚めるや否や、自分の体の奥からクリント・イーストウッドが放った大量の精液が不意に流れ落ちることを感じると、抑えきれない絶望と怒りに襲われる。瞬間、ベッドで丸めて眠っている彼の「下腹部を足で踏んづけたいと衝動が起き」(同書、65頁) たが、とりあえずタバコを口に咥え、大事にしていた外国製のライターを探す。しかし見つからない。それが彼の脱ぎ捨てたジャンパーから出てくると絶望を乗り越して何も考えられなくなる。その時、ナンシルは高台の「財閥」に電話をかけ脅迫したい気持ちに駆られる。後で明らかになるが、彼女の怒りの方向先がアメリカ軍兵士から「財閥」へ変わっているのは単なる偶然ではない。しかし当然彼女が彼らの番号を知っているはずがない。

兎にも角にも、怒りが収まらなかったナンシルは受話器を取り、唯一「暗記していた」(同書:66頁) 元彼の番号を廻す。が、電話に出たのは彼氏ではなく彼の奥さんである。彼の結婚を知らなかった彼女は一瞬、息がつかってしまったが、「殺してやる。殺して、漢江に浮かせて

やる」(同書:67頁) と、彼女が「かねてから用意していた言葉を、体から火が吹き出るほど激しい怒りとおさえきれない気持ちの入り混った声」(同書:同頁) で叫ぶ。

怒りに狂った彼女の声は、まだ多くの人が眠りにについている早朝にも関わらず、元彼の奥さんの「ささやくような優しい」(同書:同頁) 声によりかえって強調され、悲痛さが増している。電話の向こうの何もかもを「冷く凍りつ」(同書:同頁) かせる彼女の凄絶な「心の叫び」は、まるで坂の上の「財閥」の富が坂下の基地村の犠牲の上に築かれていることを暴くかのようである。

「町よ、ソウル」は、「イテウォン」の「女」という基地村女性たちの悲哀を通してポストコロニアルな状況下の韓国社会の歪みやねじれをあぶり出そうとした作品であるが、とりわけ、ここでは次のことを確認しておこう。テキストでの「イテウォン」はほぼ基地村と同義語であり、あたかもその町を監視し、そこで働くナンシルらの存在を隠すかのように高台にそびえ立った「財閥」との対極的で不均衡な関係によって彼女らのやるせない思いが際立っている。

「イテウォンの女」をめぐる 女性表象とまなざしの転倒

繰り返しになるが、「町よ、ソウル」の舞台はイテウォンの米軍基地村で、物語の担い手はホステスのナンシルである。そのため、紙面のほとんどは彼女とアメリカ軍兵士との性的場面に占められ、テキストの余白までもが精液まみれとなり、「生ぐさい」「匂い」(同書:64頁) を放つ。そこで強調されているのは、いつまでも消えない精液の匂いでつねに身体的拒否反応の吐き気に襲われながらも、「体を買ってもらう」(同書:60頁) ために「白人の女のような微笑み」を浮かべ、愛嬌を振りまく基地村女性たちの哀れな姿である。

ナンシルはもともと田舎の繊維工場で働いていた。しかしよりよい稼ぎを求め、工場の仕事を辞めてソウルにやってきたが、いつのまにかイテウォンにまで流れ込む。「同じ村の出身で、かつて同じ繊維工場で糸を紡いでいた」他の三人とともに、「人の勧めるとおりに共同」(同

書：62頁）で、安アパートを借り、真っ先に電話を引く。

その電話で、最初は「二人、クラブに行き、三人、チマチョゴリを着てキーセン・パーティーに出る、と仕事が舞い込んだ」（同書：同頁）が、最終的には「四人共、イテウォンの外人相手のゴーゴークラブに鞍替え」（同書：同頁）する。キーセン・パーティーは稼ぎはいいものの、数が少なく、多少条件が悪くてもアメリカ軍兵士に体を買ってもらうことにしたのである。

ナンシルらは四人とも、田舎の貧しい家に生まれ、教育もまともに受けられず、幼いときから繊維工場で働いていたという共通点を持つ。これは女工のステレオタイプである。ここで思い出されるのは、かの有名な『女工哀史』である。このルポルタージュによって、明治以降の日本の近代化のなかで、紡績工場の女性労働者の置かれていた過酷で悲惨な状況が世に知られることになったが、それは韓国の女工にもほとんどそのまま当てはまる。

韓国では朝鮮戦争後、反共と経済発展が国是として掲げられ、近代化が図られてきた。それが本格化した1960年代以降は、「働きながら戦う国民」という国民像が誕生する。反共イデオロギーと経済第一主義の見事な融合による新たな国民化のプロセスは、様々な形で人々を巻き込んでいく。なかでも特に貧しい農村出身の若い人たちは、それを下から支える「経済戦士=愛国者」としてときより称えられながらも、国内外の最も劣悪な集団労働や戦場に送り込まれ、「血」と「汗」と「涙」を流すことになる。そのなかのひとつが女工である。

彼女らの工場での生活は『女工哀史』さながらのもので、実際にその仕事を辞め上京する者が少なくなかった。しかしそれでも貧困を極める状況は変わらない、否、さらなる厳しさに曝される。都会とはいえ、何の知識も技術もない彼女らにできる仕事はあまりなく、挙句の果てに、性売買を行う基地村などへ流れ込んでしまう者が後を絶たなかった。そうすると、「町よ、ソウル」の女工出身のホステス・ナンシルらは、韓国の近代化のなかで大きな犠牲と負担を強いられていた若い女性の悲哀を背負う象徴的人物といえる。

「イテウォン」で彼女らを待っていたのは想像

以上のものであった。毎日「スカンクの兄弟」（同書：65頁）のような外人独自のきつい体臭を我慢し、無理やりに飲み込まされた精液の「生ぐさい」「匂い」に苦しみながらも、「一ドルでも多く欲しいから」（同書：67頁）兵士から命令されるがままに従う。だが、さらにナンシルらを苦しめ、怒り震えさせたのは、社会の冷酷なまなざしだった。

基地村女性はアメリカ軍兵士に「体を売る」「汚い」「女」として最も忌み嫌われ、社会的な蔑視の対象——韓国では彼女らに対する様々な蔑称があるが、一般的には「洋公主^{ヤンゴンジュ}」と呼ばれている——であった。単一民族の意識が強く、今よりはるかに男性中心的社会であった当時の韓国社会からすると、彼女らは社会の根幹を揺るがしかねない（おぞましきもの）であり、隠したい「恥部」であったに違いない。ナンシルの同郷の彼氏が、彼女の「イテウォンの店に来てよ。もう厭なんだから。白人みたいにして私を連れ出してよ」（同書：63頁）という言葉に驚愕し、「この色キチガイ」（同書：同頁）と罵って切り捨てる場面はその端的な例である。

そのためか、ナンシルは徹底的に「マドンナの「マテリアル・ガール（Material girl）」になろうとする。彼女にとって「ステイヴィ・ワンダーの歌」——「心の愛（I just called to say I love you）」——のような世界は単なるうわべに過ぎず、精液の匂いと同じく吐き気の対象でしかない。ジュークボックスで「マテリアル・ガール」がかかると、マドンナの「甘ったるい白そのものの声に誘惑さ」（同書：60頁）れ、他の人が相手にしている男でも近づいて「挑発するように踊り、男の関心をぶんどってしま」（同書：同頁）う。

ここで看過してはならないのは、まなざしをめぐる転倒である。皮肉なことに、ナンシルが自分を社会的蔑視の対象とする「マリリン・モンローのような」（同書：61頁）妖艶な微笑みを浮かべ、アメリカ軍兵士を誘惑しホテルに行くときだけは、彼女はもはや売春婦ではない。それどころか、むしろ優位に立ち、逆に差別のまなざしを向けることができる。「いつか映画で観た植民地にいる男に会いに行ったデボラ・カー」（同書：61頁）や、「植民地にまで男に連れられてやって来た白人の情婦」（同書：同頁）の

ように、「植民地はまだ開発が遅れ、きたなく、人は理由なしに威張ったりはいつくばったり」すると、自分を売春婦に追い出し蔑んできた韓国社会を「未開」な「植民地」と見下し、自分に投げかけられていた差別のまなざしをそのまま相手に投げ返す。

ナンシルは「白人」に拘る。「体を買ってもらう」アメリカ軍兵士はむろん、自分も徹底的に「白人の女」になろうとする。暇さえあれば、いつも店の鏡の前で「マリリン・モンローのような」「白人の女のような笑い方」（同書：61頁）を練習する。これは先述の立場の転倒と無関係ではない。最も優位に立つためには「白人」でなければならないのだ。彼女が異常なまでに「黒も黄色も厭」（同書：59頁）がっていたのはそのためである。

彼女によって行われたまなざしの転倒はきわめて政治的なものといわなければならない。というのも、ジュディス・バトラーによって提唱されたパフォーマンス的な実践と類似しているからである。

バトラーの『問題なのは肉体だ (*Bodies That Matter*)』によると、パフォーマンス的な実践とは、ある人々を現実の社会システムから排除させるために政治的に利用された侮蔑の言葉を、逆にその人々が「再領土化＝再記号化 (resignification)」することである。この再領土化により、侮辱の言葉が「支えてもいる、棄却化する権力を問題」にし、「抵抗の場と、社会的及び政治的な再記号化」が可能になる。すなわち、〈他者〉を生産し差別を生み出す侮辱の言葉の逆用こそ、社会の抑圧構造を攪乱する最も強力でラディカルな「戦い」の場となるのである。

そうすると、ナンシルのけばけばしい「白人の女」への自己同一化とその反復によるまなざしの転倒は、バトラーのパフォーマンス的な実践と大きく重なる。そこで明らかになるのは、彼女を告発し差別のまなざしを向けている社会の暴力性であり、その無根拠性である。これが中上の「冷や飯を食わされ、厄介者扱いされてきた」者たちへの傾斜と無関係でないのはいくまでもない。

男性表象の力学——日・米・韓のポストコロニアルトライアングルと相互イメージ

「町よ、ソウル」の女性表象が明らかになったところで、以下では男性登場人物に注目してみよう。テキストに登場する男性人物は、アメリカ軍兵士と日本人観光客、そしてナンシルの元彼である。

いうまでもないが、テキストにおける男性登場人物のほとんどはアメリカ軍兵士である。彼らに共通しているのは、異常なまでに強い性欲とそれによって強調される男性性である。それを物語るエピソードはテキストのあちこちに鏤められ、枚挙に遑がないが、ナンシルがバスルームのドアを開けると、男が「裸のまま股をひらき性器を誇示するような姿でソファに坐」（同書：61頁）っていたり、一晩に何度もしたがったりするのはその典型例である。

彼らは平気で「尻に手をやり」、「人の前でもやりかねない」勢いでかかってくる。ナンシルが「ノー」といっても、「その「ノー」が自分の男前と、時々ナンシルがサーヴィスの為に撫でてやる股間の立派さに欲情しての上の「ノー」だと思」（同書：同頁）い、彼女のスカートを平気でたくし上げかかるアメリカ軍兵士たちは、性器を剥き出しにし精液をまき散らす「大きな獣」（同書：64頁）である。

彼らの誇張された男性性が韓国に対するアメリカの「力」の強さを表わしているのは明白であるが、注意すべきは、韓国とアメリカの関係性である。両国間の絆はナンシルを導管として結び付けられているが、それは単に従属関係を示すものではない。むしろ、同性愛的紐帯に基づいたホモソーシャルな関係と見なさなければならない。そこには韓国のアメリカとの「兄弟」のような関係を築きたいという強い欲望が潜在しており、ナンシルらはその関係を保障し維持するための装置なのである。

いずれにせよ、何もかもを精液で汚し、雄の匂いを染みつけるアメリカ軍兵士は、男性としての絶対的な強さを勝ち誇る存在であり、その点において他の男性登場人物で彼らを凌ぐ者はいない。そうしたアメリカ軍兵士の対極にいたるのが日本人観光客である。

彼は「キーセン・パーティー」のために韓国を訪れ、「おもしろい」日本語を使うナンシルに出会う。韓国訪問の目的が「キーセン・パー

ティー」であることからすると、彼も根底においては男性性が強調される人物である。だが、アメリカ軍兵士とはきわめて対照的である。アメリカ軍兵士が獣性を剥き出しにしているのに対し、日本人観光客は「すぐは勃たない」（同書：63頁）。ナンシラが「白い腹をみせて寝転んだ日本人の性器を舌でなめて勃たせ、自分の方からまたがっ」（同書：同頁）ても、たちまちのうちに委えてしまう。

そのエピソードから明らかなように、日本人男性を特徴づけているのは何といっても性的不能性である。「白い腹」を丸出しにし「寝転んだ」姿から連想されるのは、男性としての性的機能や欲望を失いかけている中年の男である。そうした彼と、「現役の兵隊だから若く動きもきびきびして」（同書：60頁）て、「人前でもやりかねない」（同書：64頁）い「獣」のような、アメリカ軍兵士の姿との違いは歴然としている。

ただ、「女を買う」ためにイテウォンに来た日本人男性観光客における性的身体的脆弱性が、逆説的にもかつての強い男性性に滑り込み、蘇えらせ、現在の姿にオーバーラップさせていることを見逃してはならない。この日本人観光客の重層的なあり方は、韓国における日本の影響力の変化を物語るのだが、注目に値するのは過去へのメランコリックな回帰である。

彼は観光客としてときおりイテウォンを訪れ、「キーセン・パーティー」を楽しむ。現在のイテウォンの「主」はあくまでアメリカ軍兵士であり、そこで働く女性たちはみんな「白人の女のような微笑み」を浮かべている。そうした「イテウォンの女」に高いお金まで払って、今は遠い記憶の彼方にある思い出のチマチョゴリを着させる。これは、端的にいうと日本帝国という「古き良き時代」へのノスタルジアである。

そういえば、現在のイテウォン一帯の米軍基地は以前日本軍の司令部があった場所であり、また指折りの日帝公娼地域であった。そこに朝鮮時代の「キーセン」がほとんどそのまま流れ、その一部がさらに「従軍慰安婦」にまでなっていたことは今更いうまでもない。小説の「時間」が、日本が朝鮮半島を去ってからもう35年以上も経つ1980年代というのに、今なおどこにも存在しない「キーセン」を求めて韓国に来る。お腹の出た中年の体に以前のような若さ

はなく、脆弱さが目立つものの、若き時代の日本帝国の面影を求め、親しんでいた「イテウォン」を懐かしんで訪れる。彼の「キーセン・パーティー」は、あたかも亡霊のようによみがえってくる帝国主義的ノスタルジア、それ以上でもそれ以下でもない。

詰まるところ、アメリカ軍兵士と日本人観光客との対極的な男性性は、朝鮮半島における両国の政治的力関係の具象化なのであり、両者はメビウスの輪のようにつながっている。ナンシルが基地村の女と「キーセン」との間を行き来しながら両方を演じなければならないのはそのためであり、その意味では彼女は韓国の（ポスト-)コロニアルを生きる「生き証人」に他なるまい。

最後に、忘れてはならないのがナンシルの幼馴染の元彼である。とりわけ、彼はナンシルを中心にあぶり出されたアメリカ軍兵士と日本人観光客の間に位置付けることができよう。だが、単に彼が中間的な存在であるという意味ではない。

彼は「村でもまじめで勉強をよく」（同書：63頁）し、彼女の「前で委えていたためしがな」（同書：同頁）い。しかも「軍を出たばかりの齢の者の清潔さと張りがある」（同書：同頁）り、大手の商社に就職したエリートである。彼の際立った特徴は若さと優秀さであり、性的なものはすべて排除され、清らかなイメージが強い。一見、彼を特徴づける若さと優秀さは、「漢江の奇跡」と呼ばれる経済発展を遂げた韓国の明るい未来を象徴するかのように見える。確かにそういう側面があるのは否めない。しかしこのテキストがナンシルを中心に展開していることから彼を眺めると、彼に顕著なのは表裏のある性格である。

「イテウォンの女」になったナンシルと「ソウルで会うと一言も口をきいてくれ」（同書：同頁）ず、「軽蔑しきった眼で見下ろ」（同書：同頁）してはひとりでコーヒー代を払ってさっさと出て行く。その挙句、彼女には一言もいわず、他の女性と結婚してのうのうと暮らす。先述の、ナンシルが毒々しいまでに「白人の情婦」を演じ切ることで、逆に自分を罵倒し蔑視していた人々を見くびった、「理由なしに威張ったりはいつくばったり」（同書：61頁）する典型

的な人物こそ、彼に違いない。

彼がナンシルを罵り切り捨てたのは、彼女がアメリカ軍に「体を売る」「汚い」「女」として社会的に最も忌み嫌われていたからである。しかしそれを裏返すと、自分の力の無さと後ろめたさを露にしているに過ぎない。

度々指摘されてきたように、女性の身体は国家の領土を表わす国家身体の本メタファーである。その意味では、ナンシルの精液まみれの「汚い」「体」は、異民族に「征服」された「亡国」の印に他ならず、彼にとっては消すことのできない汚点＝トラウマなのである。それゆえ、ナンシルらを「赤線」のなかに閉じ込め、見て見ぬふりをする。彼女らの存在を「公然の秘密」にすることで、「国」を守れなかったトラウマを自慰するのだろう。

ひとつ注意すべきは、ナンシルらが元彼＝韓国にとっては必要悪という点である。彼女らは、いってみれば「獣」のように精液をまき散らすアメリカ（軍）に這いつくばって差し出された「生贄」である。基地村女性らが韓国のアメリカと結んだ同性愛的「兄弟」関係を保障し維持する装置として働いていることはすでに述べたが、それだけではない。マイク・モラスキーの戦後の日本の「特殊慰安施設協会」(Recreation and Amusement Association、略称RAA)についての指摘と同様に、彼女らは「外国人男性の欲望を（下流階級の）特定の」「女性の身体へと回流させることで、上中階級の女性の純潔を保護」しようとした「女の防波堤」という役割も担っている。ナンシルを捨てた元彼が、「きれい」な女性と結婚できたのはまさしく「女の防波堤」としての彼女の犠牲によるものであり、その意味では最後の電話越しでの「汚い」／「きれい」という二人の女性の対峙はひじょうに象徴的である。

以上のように、「町よ、ソウル」では男性登場人物が国家表象として用いられ、ナンシルとの関係性のなかで彼らの複雑で重層的な相互関係が鮮明にあぶり出されている。このテキストが注目に値するのは、韓国のポストコロニアルな状況をこれまで社会的に最も忌み嫌われ蔑まれてきた基地村女性の視点から問うていることにある。おそらく韓国では隠したい「恥部＝傷」を暴露されたという思いをしたに違いない。し

かしそれは韓国に限らない。というのも、「韓国」が問われれば問われるほど、それに比例して重みを増してくるのが「日本」だからである。

「アジアの中の隣国、韓国を見つめ続け、韓国で起った問題を考えつめると、単純に言えばどの局面に」も、「私らを含めた日本人のダメさ加減が見えてくるのだ。その事が私をしてアジアに向かわしめる、とでも言える。それはおそろしく醜い日本人の顔だ」(全集15:642頁)といわれることからわかるように、中上にとって韓国について考えることは日本について考えることであり、その逆もまた然りである。戦後70周年、そして日韓基本条約50周年という節目を迎える今年、本稿で取り上げた「町よ、ソウル」を含め、中上の"韓国・ソウルサーガ"が示唆するところはきわめて大きい。

付記：本稿はJSPS科研費25360030の助成を受けたものである。これまで様々な形で研究に協力してくださった方々にこの場を借りてお礼を述べたい。特に最後まで論文の添削を丁寧に行ってくださった方には重ねて感謝申し上げる。なお、本文中の中上健次の引用はすべて中上健次全集、1996年、集英社による。